

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（歯学）	氏名	大戸 敬之
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 Study of factors related to the reflection abilities of dental trainees (研修歯科医の省察能力に影響する因子の検討)			
論文審査担当者			
主査	教授	兼松 隆	印
審査委員	教授	津賀 一弘	
審査委員	教授	谷本 幸太郎	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>省察は、経験を振り返り、その経験が自分に教えてくれたことは何かについて考える機会をもつことである。そして、今後、同じような状況、もしくは予期せぬ出来事に直面したときに、よりよく対処するための“知”を見出そうとする方法論のことである。この省察は、歯科医師に必須の臨床能力の1つであり、研修歯科医が研修期間中に修得すべき重要なアウトカムである。しかし、医療専門職の省察についての研究の現状として、失敗したなどのネガティブな事象がより深い省察を促すということが報告されているに過ぎない。すなわち、深い省察につながる状況や、省察を行う人の背景によって変化があるのかという省察に影響する要素については明らかとなっていない。そこで、本研究では、よりよい研修プログラム構築や、学習単位としてのチーム構成に役立てるため、研修歯科医の省察能力に対して影響を与える因子について検討を行った。</p> <p>対象は2012-2013年の広島大学病院研修歯科医の35名で、臨床研修開始期および修了期において一人3分程度のSignificant Event Analysis(SEA)カンファレンス方式の口頭プレゼンテーションを実施し、その逐語録を作成した。研究1では、本集団の省察の特徴を把握するため、省察深度の評価を行った。評価法はO'SullivanのReflective ability rubric and user guideに基づき0-6点の7段階で点数化した。この省察深度と研修歯科医の背景的要素（性別、出身大学、国家試験受験回数、進路）や環境的要素（外部研修の有無）との検討を行った。さらに1年の研修期間を1-4Quater（以下Qとする）の4期に分けた上で、13名分の中間期の検討も加えた。研究2では、個々の逐語録について合目的なサンプリングを実施し、その内容をSteps for Coding and Theorization (SCAT)による質的分析を行った。</p> <p>研究1では、開始期から修了期の省察深度は平均値で3.17から3.43へと上昇したが、有意差は認めなかった(p=0.12)。また、省察深度が上昇した群は15名、同値群は12名、下降した群は8名であった。各群の開始期の平均値は、上昇群が2.8、同値群は3.17、下降群が3.88、修了期では、上昇群が3.93、同じ群は3.17、下降群は2.88であった。一方で、修了期の省察の深度と研修歯科医の背景的要素や環境的要素について重回帰分析を用いて検討した結果、背景的要素よりも、環境的要素に有意差が認められた。(p=0.024)。平均値の年間推移としては、1Q(3.10)から2Q(2.75)に低下し、その後3Q(3.44)と大きく上昇し、4Q(3.31)となった。1Qおよび4Qは、全体の平均値と概ね一致していた。また、4期の中では、2Q-3Q間に有意差が認められた(t=2.83, p=0.02)。</p> <p>研究2でのSCATによる分析の結果は以下のようになった。なお、テキスト原文の単語を「」、SCAT分析による構成概念を『』、理論記述やラベリングでは【】を使用し表記を行う。全体の理論記述は【スタッフの一員】、【指導歯科医との関係】、【診療の専門性】、【不足の自覚】の4つにカテゴリー化された。【スタッフの一員】では、研修歯科医が状況に溶け込むように努力しながら場に持続的に参加度を増加させ、他のスタッフと</p>			

の関わりの中から学びを得ていた。【指導歯科医との関係】では、指導歯科医からの言葉によって研修歯科医は学びを理解し、成長を自覚した。そして指導歯科医（術者）視点への移行・転換、認知が起こることで、学びを自分のものとしていた。【診療の専門性】では、一般的ではない特別と感じる診療を目の当たりとすることにより、学びを得、次への経験への欲求が増加していた。【不足の自覚】では、研修歯科医の内部で生じたネガティブな反応（思い）がモチベーションの向上、そして深い省察へと繋がっていた。また、2Qの省察深度が低い逐語録では、『慣れる』ことへの『苦しみ』という構成概念が創出されたが、この『苦しみ』の時期を乗り越えた3Qでは、主体的学習の機会が増えるにつれてクリティカルな深い省察が行われるようになっていた。

研修歯科医は、指導歯科医や上級歯科医、スタッフとの関係の中で構成される集団、つまりは学習（実践）共同体で学びを得ていた。これは特定の指導歯科医と組みとなって研修を行う診療科においてよく顕れており、また長期間関係が構築されている診療所や診療科においても同様であった。これはその関係において、実践の中で指導歯科医の技術や考え方を学びとる認知的徒弟制度的な状況の中で正統周辺型学習（状況に埋め込まれた学習）が行われており、研修歯科医は主体的体験や経験による気づきと深い省察を促される。そして、この気づきと省察の積み重ねが深い省察を行う能力の醸成へとつながっていると考えられる。本研究対象集団の省察深度については、研修開始期と修了期での差は少なかったが、これは開始期の省察深度の値が先行研究と比較して高いため増加量として表れ難かったと考えられる。一方で、出身大学間や男女間で省察深度の増減量に差がなかったことは、学士課程の省察に関わる教育の成果の現れではないかともいえる。また、省察深度の上昇と環境的要素との関連が認められた理由としては、研修歯科医は省察的实践家として歩み始めたばかりであり、個人の背景よりも、その後の正統周辺型学習的な学習環境に左右される方が大きいためであると考えられる。研修歯科医の『慣れる』という『苦しみ』を覚えていた2Qでは、テキスト中の「基本的なことができてから」、「一つ一つ確実に」と『焦燥感』との葛藤や『自戒』が【不足の自覚】としてあらわれ、次の3Qでの主体的学習の増加が【スタッフの一員】、【診療の専門性】という『成長への実感』や【『成長への継続の意欲』】へとつながり、深い省察をもたらしたと考えられる。つまり『苦しみ』を乗り越えることによって、自己のアイデンティティから歯科医師としてのアイデンティティが形成され、医療プロフェッショナルアイデンティティの成長へ第一歩を踏み出していくことになる。まさに指導歯科医には、研修歯科医が効果的に学習のできる学習（実践）共同体として機能させるために、【指導歯科医との関係】構築というロールモデルとしての役割とともに、深い省察を促すための学習支援が求められているといえる。

本論文は、研修歯科医の省察能力に影響する因子として、研修歯科医のアイデンティティおよび職場での組織文化、そしてその変化が影響することを明らかにした。本研究結果は、研修歯科医が効果的に学びを得る状況の理解へと繋がり、今後の歯科医師臨床研修プログラムの改善やより効果的な学習方略の立案に有用であるといえる。

よって審査委員会委員全員は、本論文が大戸 敬之に博士（歯学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。